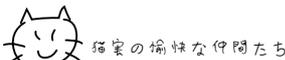


きゃつとtimes



浦安三社例大祭

豊受神社神輿渡御

6月14日(金)宵宮

15日(土)宮出し〜御輿渡御

16日(日)御輿渡御〜宮入り



2024年(令和6年)5月1日

発行・企画 / きゃつとタイムス編集委員会



神酒所 に行ってみよう

Let's go to Mikisho



西組若衆の神酒所はゴールデンウィーク頃から設置が始まる

● **誰でも寄っていいの？**
それぞれの団体や町会に所属する知人の紹介があれば最も参加しやすいが、統一したルールがあるわけではなく、飛び込みでも参加できる。神社ごとや地域、町会ごとに大まかなルールがある場合もあるので、まずは一声をかけて寄ってみるといいだろう。

浦安の祭は準備の期間が長く、例大祭当日よりも準備が楽しみという熱心な祭り好きが多い。例大祭が始まる前から祭の熱気に触れた人は、勇気を出して神酒所に顔を出してみるといいだろう。寄付の受付も神酒所で行っている。

神酒所(みきしょ)は「神輿がお休みになる場所」を指す。例大祭のために臨時で設置され、「御仮屋(おかりや)」とも呼ばれる。町会など神輿を渡御する団体には祭に向けた活動拠点の場所にもなる。

● 神酒所は何をしたらいい？

例大祭で渡御する神輿は豊受、清瀧、稲荷の三社の5基の宮神輿だけでなく、町会や同好会などが所有する神輿も渡御する。山車も含めて約80基あるといい、例大祭でそれぞれの神輿は神酒所から出発し、神酒所に戻ってくる。4月下旬からゴールデンウィーク頃から元町地区の各地に団体ごと神酒所が建てられていき、お祭りムードが一気に高まり始める。

メンバーや地域住民が集い、時には酒を飲み交わし、間近に迫った例大祭の準備を進める。例大祭が始まると、神酒所を中心に渡御が行われ、お昼休憩や他の神輿の渡御の途中の休憩の場にもなり、町会間でもてなしを行う場所でもある。

神酒所にとって大事な役割が、グループや地域のコミュニティーの場になること。神酒所に町会の

神酒所で過ごす「濃密な時間」は祭に向けた準備や団結力を作るだけでなく、地域の関係性を深め、地域コミュニティーの絆づくりにつながる。これこそ神事にとどまらない祭の意義といえる。

● 高張提灯点灯式 ●

日時/5月25日(土)午後6時〜
西組若衆神酒所で点灯式を開催。25日から例大祭までの期間中の夕方から午後10時頃まで提灯に明かりが灯される。



豊受神社 猫実3丁目13-1

祭神 豊受姫大神
創建 保元2(1157)年とされ、浦安最古の神社。
境川に流れ着いたと伝わる大銀杏は市天然記念物に指定されている。

清瀧神社 堀江4丁目1-5

祭神 大綿津見神
創建 建久7(1196)年と伝わる。
龍や竜宮城などの精巧な彫刻が施された本殿は市有形文化財に指定されている。

稲荷神社 当代島3丁目11-1

祭神 豊受大神
創建 元禄2(1689)年に小岩村(現江戸川区)の善養寺から移し祀ったとされる。
江戸時代に葛西沖で鯨が捕獲されたことを伝える石碑「大鯨の碑」(市有形文化財)が建つ。



ひと
Vol.4

中台製作所社長 中臺 洋 (52)

浦安の祭はいつもわくわくする

江戸時代から神輿作りが盛んで、「神輿のまち」と呼ばれる市川市の行徳地区。同地区に唯一残る製作所が「中台製作所」(市川市本塩)だ。浦安では豊受神社と清瀧神社のそれぞれ2基の宮神輿の修繕や整備をしている。

三社例大祭の期間中は、神輿に修繕が必要になった場合などに備え、社員総出で手分けして宮神輿の渡御に付き添う。「全国的にもあれだけ盛り上がる祭はなか

かない」と話す。祭を楽しむためには全力で、時には「馬鹿にもなれる」浦安の人たちを、器がでかいと感じている。

愛知県の仏具製作所で修業後、1994年に中台製作所に入社する。当初継ぐ予定はなかったが、99年に、後継者だった兄・顕一さん(当時36)が亡くなる。父・実さん(85)の嘆きは深く「商売をやめたい」と漏らすほどだった。「俺がなんとかするよ」。自ら申し出て、2013年に家業を継ぐ。

思いは「行徳神輿の伝統をつなぐ」こと。豊受、清瀧の二社の宮神輿を制

作した同地区の浅子神輿店と後藤神輿店は後継者の不在などで廃業した。行徳神輿のブランドを守ることで、両神輿店が残してきた歴史も風化させないことになる。18年に製作所の敷地に神輿の内部や職人の道具などを展示する「行徳神輿ミュージアム」を開館したが、あえて中台の名は付けなかった。

祭や神輿への思いを語る口調は熱い。「やるか、やらないかの議論をしている奴はアウト。どうやるか、しかない」。やるならどこよりも盛り上がるとういう浦安の人たちの気合が好きだ。行徳と気質が似ているとも思う。「これは俺の持論なんだけど、浦安と行徳は合併した方がよいよ」と笑った。

取材執筆・泉澤多美子